



出版からみた印刷界

# 『出版界に50年生きて』

## (1) 国語字典を見るばかり

史談会開催日

昭和 55 年 (1980 年) 10 月 16 日

### ■語る人

**布川 角左衛門 氏**  
(筑摩書房代表取締役社長)

私は 50 年以上出版の世界に生きてきました、その間、様々な経験をし、印刷業界にもお世話になってまいりました。それで、本日はその印刷に関する思い出を話題にしようと思います。

まず、私のキャリアであります、私は昭和 3 年に岩波書店へ正式に入社し、ここから出版人としての生活が始まったわけであります。しかし、初めから志をたて、出版の仕事に携わろうというつもりではありませんでした。人間の運命というのは、実に不思議なものであります。私は中学生時代から、月島に大きな工場のある実業家に育てられました。ところが大正 12 年 9 月 1 日の関東大震災でその工場が壊滅してしまった。私は当時法政大学の学生でしたが、これは私の人生にとって非常に大きな出来事でした。工場が壊滅してしまったので、そこを出ることになり、どうやって生きていこうか、学業を捨てるかどうか、という岐路に立ちました。その時に相談に乗っていただいたのが、後に学習院長や文部大臣になられた安倍能成先生でした。しかも、私はそれを縁にして安倍先生のお宅に 8 年もご厄介になったのですが、そのとき、安倍先生が「学費は岩波書店の岩波茂雄に出してもらえるようにしてやる」と言って下さいました。それで、私は安倍部先生の紹介で岩波先生をお訪ねしました。大正 13 年のことです。岩波先生にお目にかかりますと、先生は「君のことは安倍から聞いている。学費は出してやるから学校へ行きなさい」と言われました。しかし、私はそのとき、「何も仕事をしないで学費を出していただくわけにはいきません」と断わりました。「何か仕事をしてお金をもらうのなら良いが、ただ漫然と学費を援助してもらうというのは、私としてはお受けしがたいから」ということで断わりました。すると「それなら、うちで仕事をしたらよかろう」と岩波先生がおっしゃって、これが岩波書店と私の縁の始まりになりました。

次いで、私が配属されたのが校正室でした。ところが校正室の主任の和田さんが、「君はまだ学生なのだから勉強し給え」と言って、私に仕事を与えてくれませんでした。当時として、こういう時に仕事がもらえないくらい辛いことはありませんでした。致し方ありませんので、私は国語の字典ばかりを見ていきました。字典を見ることで自分の手持ち無沙汰を解消していました。これがその後の私にとって、どんなに役にたったかわかりませんが、それが1ヵ月以上も続いたでしょうか。そのうちに赤字の引き合わせ校正をさせてもらいました。

つまり、岩波書店と私のつながりの発足は、校正であり、印刷とも直接係わる仕事でした。その後、私は雑誌『文学』と『思想』の校正を受け持ちました。また、『岩波文庫』の創刊は昭和2年の7月ですが、この文庫発足の時、私は第一の『古事記』の校正をいたしました。次いで昭和3年に正式に岩波書店の編集部へ入り、以来今日まで出版の世界に生きてきました。

それで、古いことありますが、今日は第一に、岩波書店と関係の深い精興社さんについての話をいたしたいと思います。

昭和8年の頃でした。私が丸善へ行きましたとき、たまたま『ザルムング・ゲッシュン』というドイツの双書を手にしたところ、その印刷の綺麗さに大変感服して、その1冊を買い求めて帰りました。帰りましてから、私は精興社の現在の社長さんである青木さんに「この本を見給え。この印刷は実に綺麗だ」と言いました。すると、青木さんが「貸してくれないか」ということで、その本をお持ち帰りになった。それから10日程たったでしょうか、精興社の創業者である白井赫太郎さんが、その『ザルムング・ゲッシュン』を持って、岩波書店へ見えました。そして、白井さんが「大変良い物をお貸しいただいて誠に有難うございました。必ず精興社では、このような物を作るようになります」と私に言われました。私は、その時の白井さんの真剣な態度に心を打たれました。ここにお話しますのも、それが私の記憶に残っているからであります。

なお、古い方はご存知かと思いますが、ドイツには『レクラム』とこの『ザルムング・ゲッシュン』という2大双書があります。『レクラム』のほうが古く、これが出了のが1867年、『ザムルング・ゲッシュン』は1889年に出ました。戦争後、『レクラム』はシュトゥットガルトに、『ザムルング・ゲッシュン』はベルリンにありますが、どちらも随分長い歴史を持っています。そして、『岩波文庫』は『レ



クラム』をモデルにしたものであり、今は『改造文庫』は『ザ・ムルング・ゲッシュン』をモデルにしたものであります。

さて、次も精興社の話ですが、精興社で印刷した岩波文庫の1冊が、印刷が汚いというので、同社では社員を動員して小売書店に出ていたものを回収した、と言う美談であります。

昭和40年に白井さんが亡くなられ、山田一雄（当時社長）さんも倒れられたとき、私は朝日新聞から頼まれて、「印刷者の良心」と題し、この話を書きました。すると、これに対して印刷者の方々からも随分と手紙をいただきました。しかし、その回収されたという岩波文庫が何であったか、わかりませんでした。実は最近になって調べてもらいましたところ、それは、昭和10年1月10日に発行された、泉鏡花の『高野聖』『眉かくしの靈』だということがわかりました。この機会にお知らせしておきたいと思います。

なお、余談ではありますが、岩波書店の創業は大正2年で、これは西暦1913年である、というように、和暦を西暦に直す方程式がありますので、それをご紹介しておきましょう。これは、一時、布川方程式などと呼ばれましたが、大正の年代の場合は、その年数に11を寄せると西暦になります。たとえば、大正3年といったら西暦1914年。そうすれば今から何年前か、ということもすぐわかるでしょう。大正何年に生まれたと言っても、若い人にはよくわかりませんが、それを西暦に直すとわかり易くなります。明治時代を西暦に直すのはちょっと厄介で、まず明治33年が1900年だということを覚えておきます。それ以前は19世紀、以後は20世紀と、ここに一線を引き、以前の場合は67を寄せる。例えば、明治13年は1880年、明治20年は1887年。以後の場合は33を引く。つまり、明治38年なら、38から33を引き、残りが5ですから、西暦1905年ということになります。昭和の場合は25を寄せます。ですから昭和5年と言うと1930年となります。